

[研究論文]

豊かな友達づくりにつながる学級活動(1)の研究
—人間関係の向上に係る課題の解決を通して—

Educational Research on Classroom Activities (1) that Lead Japanese Elementary School Children
to Make Interpersonal Relationships with Friends
- Through the Process of Solving Problems that Relate to Improvement in Human Relationships -

桑野美咲
Misaki KUWANO

脇田哲郎
Tetsuro WAKITA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻
生徒指導・教育相談リーダーコース/
直方市立下境小学校

福岡教育大学教職実践ユニット

(2021年1月29日受理)

本研究は、子供たちの豊かな友達づくりを目指し、学級活動(1)において、人間関係の向上に係る課題についても話し合い、解決する実践を行うことが、子供たちの友達との関係づくりにもどのように影響するかを検討した。研究を行う前は、話し合い活動の議題が、学級集会活動の企画や学校行事・月目標への取組等に偏っていた。その偏りをなくすために、子供に学級内の人間関係から生じる課題に目を向けさせ、引き出すことができるように、学級担任が話をしたり日記のやりとりをしたりした。そして、学級会プランニングシートを活用した話し合い活動を行い、実際に子供たちが解決できるようにした。その結果、人間関係の向上に係る課題の解決について話し合いたいと考える子供が増え、子供同士の関係にも変化が見られた。このことから、人間関係の向上に係る課題の解決の実践を積み重ねることは、豊かな友達づくりにつながることを示唆された。

キーワード：学級活動(1)、豊かな友達づくり、人間関係の向上、学級会プランニングシート

1 問題と目的

小学校における学級活動(以下、学活)は、児童の学校生活の基盤となっており、(長谷川・太田・白松・久保田, 2013), 小学校学習指導要領解説特別活動編(平成29年告示)(以下、特活解説書)には、「子供の自主性を伸ばし、学校生活を一層楽しくするために、『(1)学級や学校における生活づくりへの参画』に重点を置いた学級活動の指導が行われるよう工夫することが大切である。」と書かれている。しかし、所属校では、実際は学活(2)や学活(3)に多くの時間が費やされている。所属校では、「学活は大切な時間だ」と考えている教師は多いが、校内の研究の内容は国語科であり、個人でも教科の研究は

していても、学活について学んでいる教師は少ない。学活が大切でなくてはならないとわかっているが、実際にどのようにしてよいかわからない、負担感がある、と困り感をもっている声をよく聞く。また、学級会活動について、松岡(2014)は、「学級会活動を活性化するうえで、『学級の諸問題は自分たちで解決を』のような風土づくりが不可欠である。児童生徒一人一人が、学級への帰属意識を高め、自分自身がなんらかの役割を果たすことにより、自己有用感を実感できる。そこで学級担任は、こうした学級の雰囲気づくりを、意図的・計画的に進める必要がある。」と述べている。これらのことから、学活(1)に重点を置いて指導し、子供たちが学活(1)を通して、諸問題を解決することができるようにすることが必要であると考えられる。

小学校学習指導要領（平成 29 年告示）では、新たに前文が設けられた。そこでは、「一人一人の子供が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」と示されており、特別活動の目標と合致する部分が多い。これからの社会を担う子供たちにとって必要とされる資質・能力を育むために、学活（1）の充実を図ることは重要であると言える。

主題に示す「豊かな友達づくり」とは、ただ一緒に遊んだり学んだりする友達ではなく、互いに信頼し高め合おうとする友達関係をつくろうとすることである。宇留田(1976)によると、友達が困っているときには頼まれなくても援助の手を差し伸べたり、友達が怠けていけば、真剣にそのことを心配し、ときには厳しい忠告も辞さなかったりするという友達関係のことを豊かな友達といい、そのような友達関係をつくろうとする子供を学活の話合い活動を通して育成しようとするのである。

副主題に示す人間関係の向上に係る課題の解決とは、学級集会の運営やきまりづくり等に対する課題だけに偏らないようにすることである。

所属校の子供たちは、厳しい家庭環境に置かれ生活習慣の乱れが見られる。このことが遠因となり、遅刻や欠席が増え学校への不適応を起こしている実態がある。また、一緒に遊んだり過ごしたりする友達はいても、互いに高め合おうとする友達関係まで至っていない子供もいる。

そこで、本研究では、学活「(1) 学級や学校の生活づくりへの参画」を中心に、子供たちが学級集会などの運営に関する課題だけではなく、人間関係の向上に係る課題の解決にも積極的に取り組むことで、豊かな友達づくりを促進することができるかを検証していく。

2 予備研究

(1) 目的

学活(1)の指導状況を把握し、教員の意識や話し合ってきた議題を明らかにする。

(2) 研究期間

201X年6月

(3) 研究対象

研究校学級担任（15名）

(4) 実施方法

学活(1)の指導状況を知るための意識についての

質問紙調査(報告者作成、表1)を行う。

表1 学活(1)についての教師の意識調査項目

1	学級活動の時間に、学級の問題(困っていることや、解決したいこと、みんなで作りたいものやしたいことなど)について話し合わせたことがありますか。
2	これまでに、学級活動(1)「学級や学校における生活づくり」(学級会)で、話し合った議題とその学年を教えてください。

(5) 予備研究の結果

質問1では、6月の時点で、約7割の担任が学活の時間に学級の問題を話し合わせたと答えている(図1)。前年度以前も含むと、8割以上の担任が話し合わせたことがあると答えている。ここで、「ない」「その他」と答えている担任は、学級担任経験が1年目、2年目の教員である(図2)。しかし、学活(1)の時間に話し合った議題を見てみると、「学級目標づくり」や「集会活動の企画」、「月目標への取り組み」が約9割を占めている(図3)。前年度以前も含め、これまでに話し合った議題を見ても、学級集会活動の企画や学校行事・月目標への取り組み等についての話合いが多く(図4)、「特定の人だけで遊

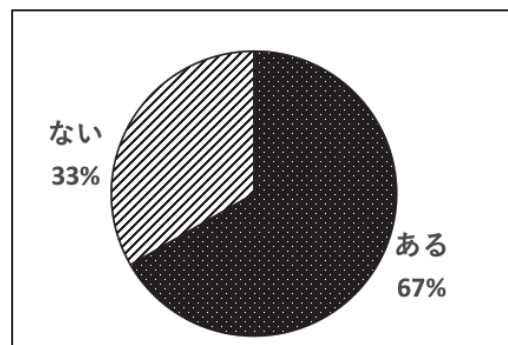


図1 質問1(学級の問題について話し合わせたことがあるかどうか、201X年6月)

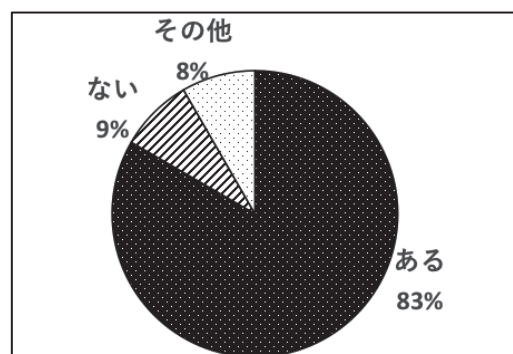


図2 質問1(学級の問題について話し合わせたことがあるかどうか、201X年度以前も含む)

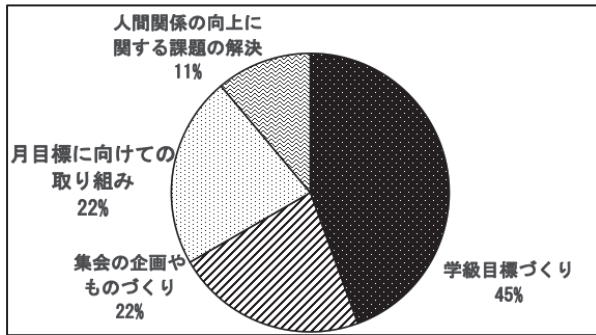


図3 質問2 (学級会で話し合った議題, 201X年6月)

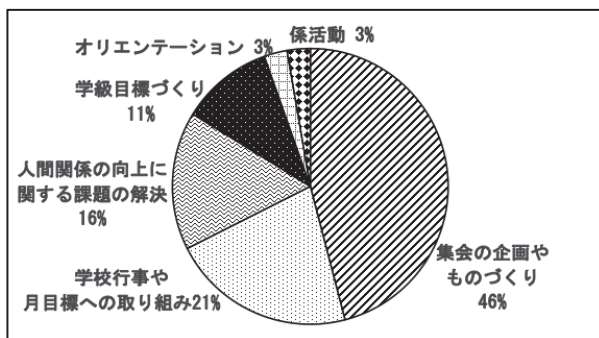


図4 質問2 (学級会で話し合った議題 201X年度以前も含む)

んでいる」等の人間関係の向上に係る課題の解決に取り組んだ議題は16%という結果であった。特活解説書に示されている学活(1)の項目の中で、特にアには「生活上の諸問題の解決」と書かれているが、実際は集会やものづくりに偏っていることがわかった。

予備調査の結果から、学級集会活動の企画や学校行事・月目標への取組等の話し合いが多いことや、特定の人だけで遊んでいる等の人間関係の向上に係る課題の解決に取り組んだ教師は少ないということがわかった。このことから、人間関係の向上に係る課題についても話し合わせることの必要性があると考えた。

3 研究

(1) 目的

学活(1)において、人間関係の向上に係る課題まで話し合って解決することができるようにするための話し合い活動を実践し、豊かな友達づくりに効果があるかを検証する。

(2) 研究期間

201X年5月～201X年12月

(3) 研究対象

実践群：A小学校第4学年B組児童(21名)

協力群：A小学校第4学年C組児童(21名)

(4) 測定内容と測定方法

子供を対象とした質問紙は、共同体感覚尺度を小学生用に簡便化したもの(大熊, 2014)と学活に対する意識についての記述を授業実践の前後に行う。また、学級担任に対して、子供の姿や人間関係の変容についての聞き取り調査と学活に対する意識調査を行う。

(5) 実践の具体的内容

① 子供が学級内の人間関係から生じる課題に目を向け解決に至る授業づくり

(ア) 子供に学級内の人間関係から生じる課題に目を向けさせるための関わり

子供が学級内の人間関係から生じる課題に目を向けることができるようにするために、学級担任が主に朝の会や帰りの会を使って子供たちに話をした。話の内容としては、学級目標に意識をもたせ、自分たちの現在の姿を見直させたり、これから行われる学校行事と関連させて、今の子供同士の関係に目を向けさせたりするような話である。また、報告者も補佐として、休み時間や給食時間等の子供と関わる時間の中で、子供たちが人間関係について意識を向けることができるように、友達関係や学級の様子を尋ねたりした。そして、会話の中で出てきた課題について、どのようにすれば解決できるのかを一緒に考えたり、学級会で話し合うことも有効だということを伝えたりし、後の話し合い活動につながるようにした。

(イ) 子供の課題を引き出すための関わり

子供が抱えている人間関係から生じる課題を引き出すために、日記を書かせた。日記には、子供が自身の思いを書くことができるようにするために、まずは、楽しかったことや頑張っていることを書かせることから始めた。これまで学級担任と日記のやりとりをした経験がなかったため、日記を書くことに慣れてから、友達との関係や学校生活についての悩みや思いについても書かせるようにした。日記に何を書いてよいかわからない子供もいたため、その場合は学級担任と報告者が質問を書くことによって、子供の思いを引き出すことができるようにした。学級担任と報告者が日記を読み、必ずコメントを書いて返した。

子供たちは、初めは友達と遊んだ内容や、学級担任に自分の好きなものについて紹介していた。慣れてきたり、日記に書いた課題について話し合ったり解決したりすると、他の子供も自分の悩みや学級の課題について書くようになった。日記に書かれた内容について、学級担任が子供に詳しく話を聞くこと

で、さらに子供の課題を引き出すことにつながった。 (ウ)人間関係の向上に係る課題を解決するための話し合い活動

学級内の人間関係から生じる課題について、子供に意識させたり日記から聞き取ったりしたことをもとに、学級会を行った。学級会を行うにあたり、報告者が学級担任の考えを聞き、一緒に学級会プランニングシート(脇田, 2019)(以下、学級会P S)

(図5)を用いて学級会の一連の流れを考えた。学級会P Sは、児童に気づかせたい学級の諸問題から、どのような議題で話し合い、実践させるかを一枚のシートにまとめて書くことができるものである。4年B組で行われている学級会のうち2回の学級会に、報告者が介入し、学級会P Sを作成しながら研究を進めた。

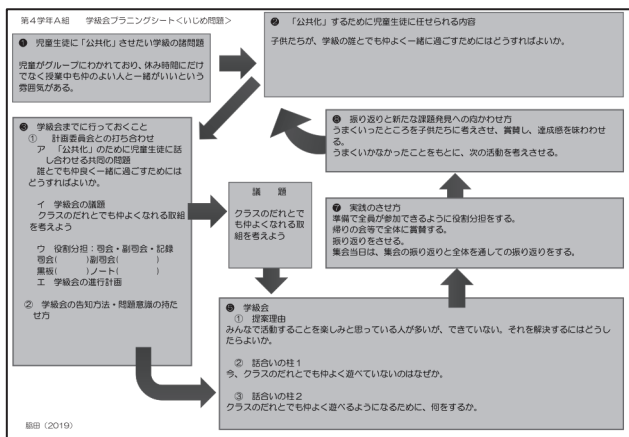


図5 学級会P S

1回目の学級会

表2 1回目の学級会の内容

議題	クラスの誰とでも仲よくなるる取組を考えよう
提案理由	みんなで活動することを楽しみと思っている人が多いが、できていない。それを解決するにはどうしたらよいか。
話し合うこと①	今クラスの誰とでも仲よく遊べていないのはなぜか。
話し合うこと②	クラスの誰とでも仲よく遊べるようになるために何をするか。

1回目の学級会の議題等については、表2の通りである。学級担任が学級会P Sを活用するのは初めてであったため、報告者が学級担任に聞き取りをしながら、学級会P Sに記入した。それをもとに、学級担任と付加修正をしながら、学級会について考え

た。

学級担任は、これまで、学級の子どもたちの人間関係がグループに分かれ、休み時間だけでなく授業中にも影響していることに課題があると感じていた。その課題に気づかせるために、学級目標を意識させ、学級のみんなで仲よく遊ぶことができているかどうかを尋ねた。また、「学級みんなで遊んだり活動したりすることが楽しみかどうか」「学級みんなで遊んだり活動したりできているか」とアンケートをとったところ、楽しみにしている子供が多いができていない、という結果がわかり、提示し、課題意識をもたせた。

話し合うこと①では、子供たちからは、「係が提案しても苦手な遊びのときには来てくれない」「同じ遊びばかり提案している」等の意見が挙がった。学級みんなに遊びを呼びかける係からの意見と、参加する子供たちからの意見、普段の遊びの中で困っていることの意味が出た。

話し合うこと①を学級担任が簡単に整理し、話し合うこと②では、「みんながわかる遊びを提案する」「遊ぶ日にちを決める」「苦手な人のルールを決める」等、みんなで楽しく遊ぶための工夫についての意見が出され、決定した。学級会後は、課題について全員で話し合っただけで決定することができたことを賞賛する声かけを行った。学級会後、係が中心となってみんなで遊ぶ企画を提案し、実践につなげることができた。

2回目の学級会

表3 2回目の学級会の内容

議題	学校がつまらなさと感じている友達に4-Bとしてできることをしよう
提案理由	最近学校がつまらなと思うことがある。自分はどうしていけばよいかかわからないし不安なので、みんなの意見が聞きたい。
話し合うこと①	つまらなさと感じる理由や原因は何か。
話し合うこと②	4-Bとしてできることは何か。

2回目の学級会では、報告者が学級担任の相談に乗りながら、学級担任が学級会P Sを書いて授業の流れを考えた。

日記のやりとりを続けていく中で、子供たちから人間関係の悩みが書かれるようになってきた。そのうちの1つに、D児が「学校がつまらな」と日記

に書いたものがあつた。学級担任はこれを見て、このように考えているのはこの子だけではないであろうと考えた。また、学級内の人間関係をみても、子供たちは、この問題を個人の問題として捉えず、学級の問題として捉えることができるであろうと考えたため、この問題を学級会で話し合うことをD児に提案し、計画委員会も一緒に議題について考え、全員に承認され議題化した。

話し合うこと①では、D児の思いだけでなく、「実は自分も苦手なことがある」という意見や、「学校がつまらないと思っている人は、こういう理由があるのではないか」という意見のように、自分のことを話したり友達の思いを想像したりしながら話し合うことができた。勉強のことや遊びのことなどの意見が出され、学級担任が簡単に整理した。

話し合うこと②では、学級としてできることの見解を出した。「わからない人がいたときには勉強を教えてあげる」「みんなで遊ぶ時にはみんなが納得する遊びをする」等の意見が出され、決定した。学級会の後は、子供たちから出された課題について話し合い、決定することができたことを賞賛する声かけを行った。その後、決まったことは教室内に掲示することになり、子供たちが意識して勉強を教え合う姿や、休み時間に一緒に楽しく遊ぶ姿が見られるようになった。

②豊かな友達づくりを校内で推進するために必要な情報収集

秋山(2014)によると、集団の形成過程には段階があり(表4)、それぞれの段階に合った教師の指導があるとされている。集団の形成過程に合った話し合い活動を行うことができるように、学級集団の形成段階に応じた議題例を、学活(1)の年間指導計画に示していく必要があることがわかった。

表4 3段階学級集団形成モデル(秋山, 2014)

第1ステップ	教師主導型	教師が主導しながら、児童に望ましい集団活動を体験させる時期
第2ステップ	児童の自主的活動への移行期	児童の多くが集団活動に慣れ、自主的に活動を進めることができるようになる時期
第3ステップ	児童の自主的活動期	児童が生活の中で課題を見つけ、自主的な取り組みを計画実践することができる時期

(6)結果

①共同体感覚尺度から

実践群のB組(21名)と協力群のC組(21名)を分析対象とし、共同体感覚尺度を事前の6月と事後の12月に実施した。「所属感・信頼感」、「自己受容」、「貢献感」の3因子において、群(実践群・協力群)と時期(事前・事後)による2要因分散分析を行った(図6)。その結果、貢献感については交互作用が有意であったが協力群の有意な下降のみであり、3要因とも実践群において有意な上昇は見られなかった。しかし、3要因とも協力群は数値が下がっているのに対し、実践群では数値が上がっている。子供が学級内の人間関係から生じる課題に目を向け解決に至る実践、振り返りを行うことで、一人一人の共同体感覚が高まり、学校適応が少しずつ促進されてきているということが考えられる。

②学活に対する意識の記述から

実践群の子供に、「あなたが、みんなで話し合いたいと思っている学級の問題はなんですか。」という質問を7月と12月に行った。回答を分類すると、

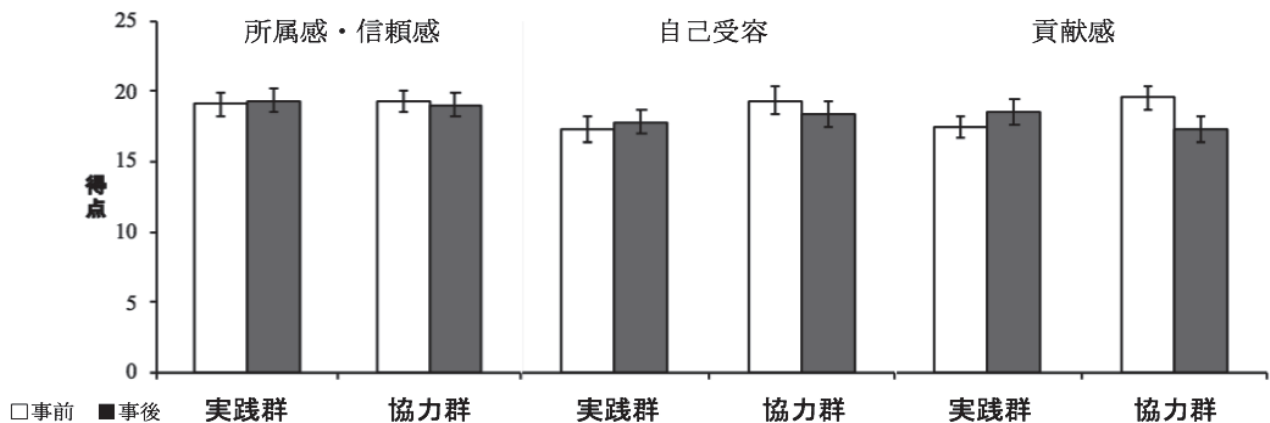


図6 共同体感覚尺度の学級平均の推移

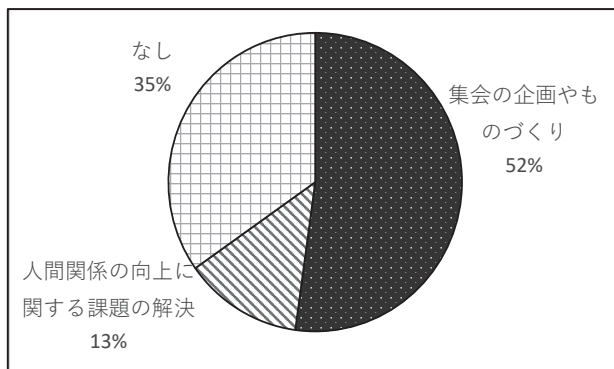


図7 みんなで話し合いたいと思っている学級の問題 (7月)

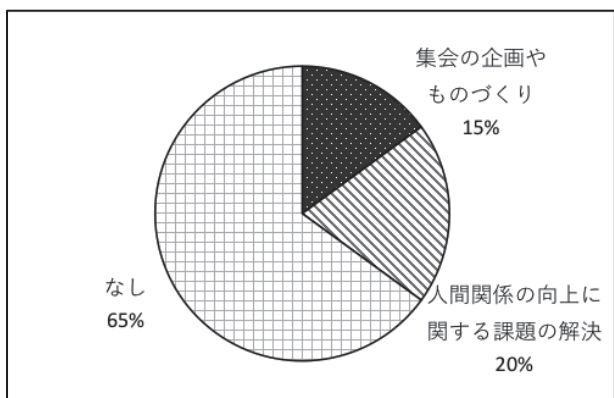


図8 みんなで話し合いたいと思っている学級の問題 (12月)

図7・8のようになった。7月は、「ドッジボールをしたい」「キャラクターをつくりたい」というような集会の企画やものづくりについての回答が52%、「喧嘩をなくしたい」というような人間関係の向上に関する課題の解決は13%であった。12月は、集会の企画やものづくりについての回答が15%、人間関係の向上に関する課題の解決についての回答が20%であった。人間関係の向上に関する課題の解決については、「悪口が多いからなくしたい」「喧嘩をしないようにしたい」等の議題案が書かれていた。このことは、子供たちが学級内の人間関係から生じる課題に目を向け、解決するための話し合い活動を行ってきたことにより、自分たちで人間関係の向上に関する課題についても話し合っ解決できることに気づいている子供が増えたのではないかと考えられる。しかし、「なし」の回答が35%から65%へと増えており、学級生活向上に関する問題解決への関心の低下という課題が残った。この課題を解決するためには、子供が学級の問題に目を向ける機会を増やすことができるように、担任からの働きかけを行い、継続した取組が必要だとわかった。

③学級担任への聞き取りから

(ア) 子供の姿や人間関係の変容について

学級担任に、子供の姿や人間関係の変容についての聞き取り調査を行った。すると、子供たちは、友達が不安に感じていることや苦手としていること等、特にマイナス面のことについて、これまでなかなか発言できなかったことについても発言できるようになり、他者理解が深まったという話を聞くことができた。

また、人間関係づくりに課題を抱えている子供3人についての変容についても聞いた。D児は、「どうせ言っても変わらない…」というような考えをもちがちであったが、提案者として議題に取りあげてみないかとはたらきかけた時、すぐに了承し、学級会でも積極的に発言していた。普段の生活でも他者の考えを尊重しようとする行動も増えてきたように感じるという話を聞くことができた。また、A児は共同体感覚尺度の結果が3項目全てにおいて大きく高まっており、学校適応を促進することができたと考えられる(図9)。E児は、授業中など全体の前で自分の発言する機会は少なく、学級会でもほぼ発言はなかったが、事前のノートには自分の考えをしっかりと書いていた。友人の間ではそれなりに信頼関係が築けているようだが、コミュニケーションの取り方が暴力的になることもあるという課題も残っている。共同体感覚尺度は、3項目とも数値が下がる結果となった。これから、継続してE児の思いを引き出し、学級会でも発言できるようにしていく必要がある(図10)。F児は、あまり他者には興味はないように感じるが自分に関係のある話になるとよく考え、発言する姿が見られた。第2回目の学級会でも提案者視点というよりも自分に置き換えて発言しており、大切な思考だと思おうという話を聞くことができた。共同体感覚尺度の結果は、所属感・信頼感、自己受容の結果が少し下がっていた。しかし、2回目の学級会で自分に置き換えて発言できていたことから、継続することでこれから結果が高まることも考えられる(図11)。

(イ) 学活に対する意識について

学活について、学級担任は、子供たちが感じている個人の問題でも取り上げ方次第で学級会で話し合うことができるのだと感じるようになったという話を聞くことができた。教師自身が学級の実態から考える課題を取り上げて、楽しい学校生活、仲間づくりにつながる集会活動等を話し合わせることも可能ではあるが、子供たちが感じている問題をいかに教師が汲み取って必要に応じて働きかけをしながら「子供たち発信」で考えさせていくことの大き

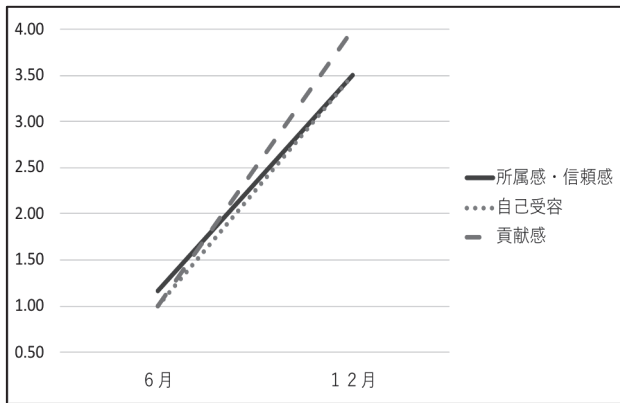


図9 D児の共同体感覚の変容

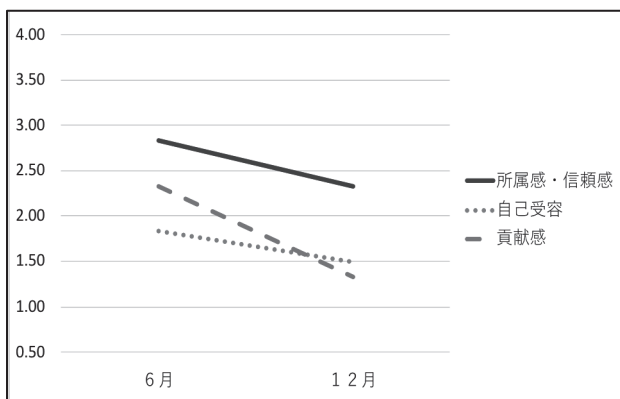


図10 E児の共同体感覚の変容

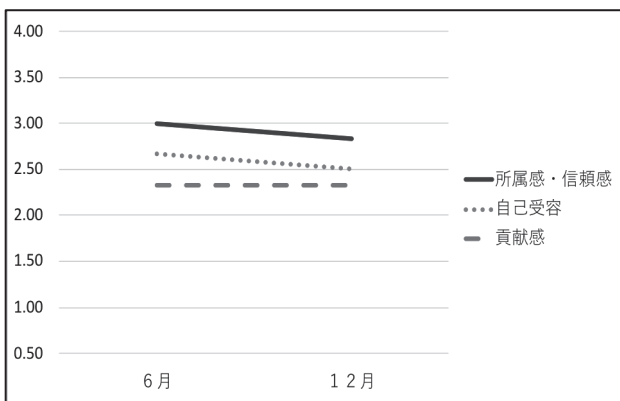


図11 F児の共同体感覚の変容

切さを感じたと話していた。しかし、なかなか定期的・継続的にうまく取り入れられなかったことが反省点であると話していた。

(ア)(イ)の学級担任への聞き取りの結果から、研究Ⅰを通して子供同士の理解が深まり、それをきっかけに普段の生活でも友達のことを考えることができるようになってきた子供の姿も見られるようになったということがわかった。しかし、1年間を見通して実践を進めていくという点で課題が残った。

4 総合考察

予備研究, 研究を通して, 学活(1)で, 学級目標づくりや集会の企画だけでなく人間関係の向上に係る課題についても話し合わせることで, 子供同士の理解が深まり, 豊かな友達づくりにつながることを示唆された。橋本(2011)は, 学級集団が信頼関係で結ばれるには, 子供が「傷付く」ことから逃げず, 子供たちがぶつかる問題を自分たちで解決することが必要であると述べている。また, 話し合い活動により, 温かな子供の言動につながったと述べている。このことから, 本研究で行った人間関係の向上に係る課題の解決も子供たちがぶつかる問題であり, 続けることで子供たちの関係がよくなり, 豊かな友達づくりにつながるということがわかった。

しかし, 今回研究を行ったのは4年生の1学級のみであり, 期間も限られたものであった。人間関係の向上に係る課題の解決が豊かな友達づくりに効果があるか, より正確に検証するためには, さらに対象を他の学年にも広げ, 1年間を通して, 秋山(2014)による3段階学級集団形成モデルを参考に話し合い活動を進めていく必要がある。橋本(2011)は, 生活の問題に子供が向かう実践が積み重なっていけば, 学校生活が変化し, トラブルやいじめに強い学校づくりにつながると述べている。このように, 今後対象を広げて継続した話し合い活動を行っていくことで, 豊かな友達づくりが全校に広まり, 子供たちの課題が解決され学校適応がさらに進んでいくと考える。

引用・参考文献

- 秋山 麗子 2014 特別活動を中心にした小学校の学級集団形成に関する研究 教育学論究 6 195-207
 長谷川 祐介・太田 佳光・白松 賢・久保田 真功 2013 小学校における解決的アプローチにもとづく学級活動の効果-測定尺度開発と学級・学校適応に与える効果の検討- 日本特別活動学会紀要 21 31-40
 橋本 定男 2011 特別活動を通じた学校の特色づくり 日本特別活動学会紀要 19 17-21
 松岡 敬興 2014 特別活動における望ましい「学級会活動」のあり方に関する研究-ドイツヘッセン州における「Klassenrat(学級会)」の取組に学ぶ- 桃山学院大学総合研究所紀要 39 3 127-140
 文部科学省 2017 小学校学習指導要領(平成29年告示)
 文部科学省 2017 小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別活動編
 宇留田 敬一 1976 学級会活動の改造 明治図書

